



教授の呟き

第38回

都市に宿る物流の地霊

東京海洋大学教授

苦瀬博仁

風水で城下町の立地選定

戦国武将が城下町を建設するときには、地取り、縄張り、普請（ふしん）、作事という手順を経ていた。今の言葉では、地取りが立地選定、縄張りは測量と都市計画、普請が土木工事、作事が建築工事である。時代劇には、ときどき普請奉行や作事奉行が出てくる。

立地選定では、風水「四神相応」の思想に従っていた。北に山（玄武）をいだし、東に河川（青龍）を控える。南に水辺や海（朱雀）があつて、西に街道（白虎）に通じる場所が、最適とされたのである。この思想を江戸に当てはめてみると、東と南には隅田川と江戸湊があり、物資輸送路としての役割も担っていた。

立地選定とロジスティクス

徳川家康は関東任地の居城として江戸を選んだ。その理由について、皇學館大学教授の岡野友彦氏は「中世を通じて東国水上交通の要衝であった江戸を家康が選ぶのは、あまりにも当然の選択であった」としている。

都市史研究家の鈴木理生氏は、江戸の街づくりについて「当時唯一の大量輸送手段としての水運と、その基地を確保するためのものであった」としている。⁽¹⁾⁽²⁾

ビジネス用語として定着したロジスティクス（Logistics：兵站）は、

もともと食糧や軍需品の供給補充輸送を意味した。戦略（Strategy）と戦術（Tactics）とともに三大軍事用語であった。ロジスティクスに優れていた戦国武将が、都市の物資供給路の重要性に気付かなかつたはずはないと思うのである。

それゆえ仮説として「四神相応の思想に見られる河川や水面の配置は、単に気候風土上の要件だけではなく、都市の成立に不可欠な物資供給（ロジスティクス）を意識していたに違いない」と考えてみたい。身びいきに過ぎるだろうか。⁽³⁾

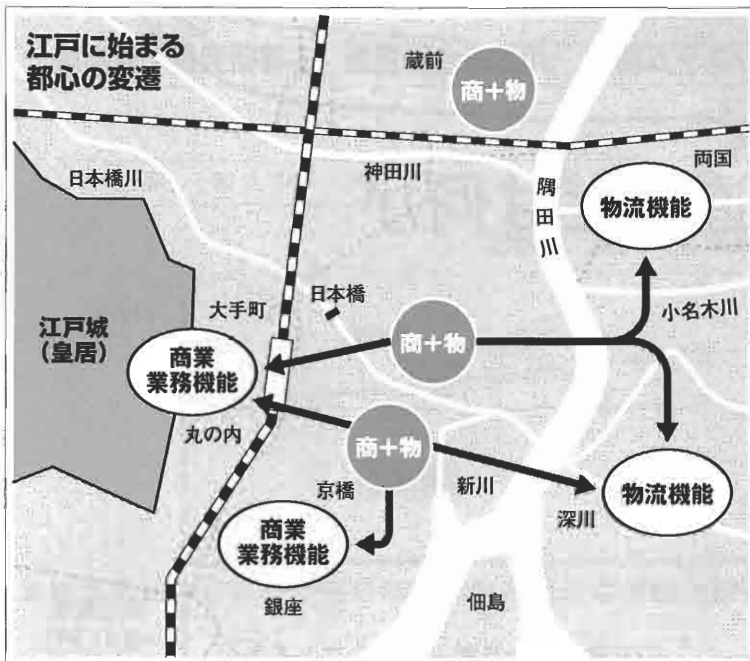
河岸から始まる商業中心地

江戸市中への物資供給の拠点は、河岸（かし）であった。河岸とは、河川沿いの荷物の揚げ降ろし場所である。また卸売市場を「魚河岸」と呼ぶように、市場のことも意味した。

日本橋の魚河岸は、歴史が長い。始まりは天正18（1590）年に家康が江戸に入ったとき。摂津国西成郡佃村の住民が漁業に従事する許しを受け、小田原河岸で江戸市民に販売したのが最初とされている。

関東近郊からは野菜や醤油（しょうゆ）などの生活物資が、利根川・江戸川・隅田川などを経て、高瀬舟で運ばれていた。加えて1671年と72年に、東廻り・西廻り航路が開発され、全国からの年貢米や生活物資は、菱垣廻船や樽廻船で江戸に輸送された。そして、隅田川河口付近の江戸湊で平田舟に積み替えられ、河岸に

江戸に始まる 都心の変遷



江戸時代の新川の酒河岸（模型：東京みなと館）



現代の隅田川と新川・佃島付近

運ばれるようになった。

隅田川中流・日本橋川・神田川などの河川沿岸と、河川を結ぶ水路・運河の沿岸の舟着き場は、すべて河岸となった。しかも米の蔵前、魚の日本橋、野菜の神田、酒の新川など、品目別に集積地が決まっていた。

江戸時代の河岸は、荷揚げ場としての物流機能とともに、今の商店街のような商業中心地（または都心）の原型でもあったのである。

400年の時を貫く都市の地霊

日本橋や京橋は商業の中心地だった。1657年の明暦の大火以後、日本橋などの問屋は、隅田川の対岸の深川に蔵を設けるようになる。材木河岸も、深川に移転した。こうして商業兼物流の施設だった河岸は、少しずつ商物分離が進んでいった。商業の日本橋・京橋地区、物流の深川地

区という形をとったのである。

明治以降になると、さらに現代的な都心へと変化していく。金融ビジネス街として兜町、問屋街としての小伝馬町や堀留などだ。都心の拡大は続き、今では大手町や丸の内から、虎ノ門や赤坂にまで広がっている。

深川地区では物流施設の集積が続き、今も大きな倉庫やトラックターミナルが並んでいる。

江戸期の河岸を起源とする都心の拡大・発展と物流施設の集積は、現

代の東京にも引き継がれている。四神相応の思想に始まる社会基盤施設（インフラ）の計画と整備が、400年の時を経て、今もなお息づいているのである。⁽⁴⁾

- (1) 岡野友彦：家康はなぜ江戸を選んだか、教育出版、1999
- (2) 鈴木理生：幻の江戸百年、筑摩書房、1991
- (3) 苦瀬博仁・小林高英：都市のロジスティクスと風水、日本都市計画学会誌、第245号 2003
- (4) 鈴木博之：東京の地霊、文藝春秋社、1990

東京海洋大学 海洋工学部
流通情報工学科 教授

苦瀬博仁

(くせ ひろひと) 1951年東京生まれ。73年早稲田大学理工学部土木工学科卒業。75年、同大学大学院修士課程修了。81年、同大学大学院博士課程修了後、日本国土開発に入社。86年から東京商船大学助教授、94年より同大学教授。2003年大学統合により、東京海洋大学教授。副学部長を経て、04年4月より評議員。94年から95年の1年間、フィリピン大学客員教授。04年6月より東京大学大学院医学系研究科客員教授（併任）。主な著書に「付加価値創造のロジスティクス」（税務経理協会）、「都市交通—都市交通計画・都市物流計画」（丸善）、「マニラ・エンジョイ・トラブル」（論創社）、「明日の都市交通政策」（成文堂） <http://www.e.kaiyodai.ac.jp/kuse/>

